



「ストランド」誌に掲載された、シドニー・バジェットによる「海軍条約文書」の挿絵。

シャーロック・ホームズの家計簿

駒月雅子

(翻訳家)

まるで事件そのものが報酬であるかのように、ホームズは依頼人から受けた仕事に嬉々として取り組む。しかし、実際ホームズ作品を精査してみると、ハドスン夫人宅の下宿代が週に一人二〜三ポンド(約四万〜六万円)であるなど、日頃からかなりの出費があった。ストラディヴァリウスも所持していたという名探偵は、いったいいくら稼いでいたのか。

シャーロック・ホームズが初めて事件を手がけたのは一八七四年ごろ、大学生のときでした。その事件で学友の父親である治安判事から「これはあなたの天職だ」(「グロリア・スコット号」と褒められたのをきっかけに、一九〇三年ごろに引退するまで、世界でただ一人の諮問探偵なる看板のもとに生計を立てていました。厳密には引退後も事件を引き受け、探偵人生をしめくくる「最後の挨拶」は一九一四年ですが、時代の潮目を鑑みればヴィクトリア朝後期(一八七〇年代〜一九〇一年)の影響を受けた人物と言えるでしょう。

彼の懐事情に触れるにあたって、まずは社会的背景を整理しておきたいと思います。

当時のロンドン経済事情

産業革命の成熟期に入っていたこの時代、英国社会は上流階級(貴族などの地主)・中流階級(ブルジョアや専門職)・労働者階級(熟練と非熟練)の三つに分かれていました。地方の地主を先祖とする諮問探偵のホームズと開業医のワトソンは中流の上層です。国家が世界の工場、さらに世界の銀行として繁栄する一方、国内では貧富の差が広がり、人口が急増した一八八〇年代のロンドンでは住民の約三分の一が貧困層だったことがわかっています。怪我と病気にたたられ戦地から戻ったばかりのワトソンは、ロンドンを「巨大な汚水溜めともいうべき大都会」と表現しています(『緋色の研究』)。監獄も同然の救貧院に入るくらいならと路上や粗末な長屋で暮らし、売春や物乞いで飢えをしのぐ者も少なくありませんでした。『緋色の研究』や『四つの署名』でホームズが日当一シリングを払って協力させるベイカー街不正規隊は、ご存じのとおりストリートチルドレンのグループです。それでも一八七〇年の基礎教育法で子どもは皆、六年間無料で初等教育を受けられるようになります、識字率も上がりました。一八八九年の事

件を描く「海軍条約文書」には、ホームズが公立小学校を「未来を照らす信号灯」と呼んで、国の将来を担う英知の集まりに希望を見いだす印象深い場面があります。数々の発明品が誕生、普及したことで女性の社会進出も始まりました。ホームズ物語の中の働く女性はメイドや家庭教師といった個人宅の使用人がほとんどですが、下宿経営者やタイピストも登場します。

このように国全体、とりわけホームズの活動拠点だったロンドンでは、希望と不安が背中合わせの状態でした。「赤毛組合」の質屋の主人も、「赤い輪団」に出てくる下宿屋のおかみさんも、街頭で働くその日暮らしの人々より安定した立場にありながら、お金の心配を抱えていました。大学卒業後すぐに、つてもないロンドンへ出てきたホームズはどうだったのでしょうか。彼の収支バランスを探っていくことにします。

ご参考までに、主な通貨単位と現在の円に換算したおおよその数字を示します。

一ポンド＝二〇シリング(約二万円)、一シリング＝一二ペンス(約一〇〇円)、一ギニー(医師や弁護士などへの謝礼はこの単位)＝二一シリング、一クラウン＝五シリング(約五〇〇円)、一ペニー＝四ファージング(約八〇円)